

私の仕事の履歴書—その 1

香取 良和 (東京江東クラブ)



初めての仕事*1

相川ブリテン委員長より「香取さんの仕事を書いてよ」と依頼されパソコンに向かったが、さて今は何の仕事をやったんだろーな?と考えるほど文具業界は変貌を遂げた。この業界に入って半世紀以上になる。今年辰年の 72 歳現役。いい機会だと自分がやってきた仕事を振り返ってみた。

中学 (足立四中) を卒業し高校入学したでの 4 月に、父が亡くなり借金もあった為、兄 (上野高校) も私も働かねばならず夜間部 (江北高校) に編入した。人生最初の仕事は、紙箱を造る紙器工場。指を落としている先輩を見て身の危険を感じ一週間で退職。従兄から芝浦のトヨタの修理工場を紹介されたが、絶対向かないとペーパーテストは白紙で提示し、後日、従兄に怒られる。

工場は駄目、職人も向かない、でも商売があるじゃない。いっそ自分でやろうと、母方の叔母の家が築地で乾物問屋を営んでいたの、「紀文」や「味の濱藤」を紹介してもらい、自転車の荷台に箱を二段重ね、かまぼこ、さつま揚げ、魚の干物、納豆などを積み、墨田区から足立区の家へ売り歩いた。最初は順調で我が家のおかず用に残る程度であったが、6 月の梅雨時は売れ残りが多く、部屋の中に干物をぶら下げ、部屋中が魚臭くなり、自転車行商は諦めた。次は乾物の卸商、足立区の乾物屋周りで注文を取り、最初のほうの店で「昆布」とか「かんぴょう」など注文を貰うと、他の店に「今日は、昆布とかんぴょうが相場安いですよ」等と同一品種を少しでも多くと心がけ、結構な商いであったが、一日に足立区の綾瀬から築地まで「かんぴょう」「鮭缶」等を積み、毎日二往復は、高校 1 年と若い結構きつく、雨の日は最悪、卸商も残念ながら撤退。

この頃から「築地」になじんでいたの思い切って魚河岸の仲買に勤めた。(高校も江北から、明石町の京橋高校へ)

築地での塩干業*2

現在は、「仲卸」と称するが当時は「仲買」と呼ばれていた。築地の市場は、世界一の市場であり、魚類と青果で一日 6 万人が入り出し活況を呈し、休日も月 3 回「2」の日だけ。大洋漁業の子会社の大都魚類など、大卸が 7 社、仲買が約 1250 社 (現在は 730 社) あった。



いざ働くとなるとどの業種で働くか? 大物 (まぐろ) はとにかく重そう、二人がかりで長い包丁で解体、危なそうだし包丁研ぎも大変。寿司ネタなどの特種物は、冬は手が凍える。鮭は箱が重く冷蔵庫での作業が絶対きつい。貝類はむき身が面倒そう、等とあれこれ迷い、楽そうかなと選んで塩干業 (するめ、竹輪など) に勤務した。

常磐線の綾瀬駅から 4 時 24 分の始発で上野経由で新橋に 5 時ごろ到着。当時バスが 10 円位、タクシーが初乗り 70 円。バスよりタクシーと 7 人で相乗り。時々お巡りが怒るが、当時は客が威勢が良かった「うるせーパンツ野郎、いいから行け行け」「なにがパンツ野郎だ」「てめーの金じゃーパンツしか買わねーんだろ」運転手が「これですから勘弁してください」毎日 10 円で相乗り。築地到着後、コッペパンに「ジャムとバター」を買いながら、5 時半ごろセリで落とした品を取りに行き店頭並べ。客が来るのは 6 時過

ぎ頃から。店も客も今より威勢がよかった。時には客の財布を取り「こんなにあるじゃねーか」。また、大玉そろばん片手に「これでどう?」「もっとまけろよ」「駄目、無理」「じゃいらねー」で7~8メートル行きかかると「バカ野郎まかったよー」絶妙の駆け引きが勉強になる。築地魚河岸の最高の時代であった。売れ残ると冷蔵庫へ、「40分いると死ぬぞ」と脅かされながら、凍ってくっついた箱を手鍵（人差し指と中指ではさむ）ではずし、上下入れ替作業。現代のような良い防寒服もなく20分位で出てくると「今日も生きてたー」である。

築地での生活*3

市場では楽しみが多かった。とにかくあらゆる魚を目にし、手で触れること出来、飽きることが無かった。失敗もある。セリ場で大きなサメが置いてあり、歯の構造を見ようと口に手を入れ少し持ち上げようとし力をいれ、指をざっくり、サメの歯は鋭かった。もう一つの楽しみは昼飯、ほぼ毎日弁当はご飯（麦飯）だけ詰めていき、弁当箱の蓋を持ち何軒か回る「おーこれ持っていけ」とおかずをくれる。シラス、佃煮、さつま揚げ、鮮魚等、マグロの中落ちも骨を一枚、最初「どうやって食べるんですか」と聞くと、ハマグリ（ハマグリ）の殻で身をそぎ落とし醤油をつけてくれ「どうだ美味いか」「最高ですね」自分が食べ、残りを弁当箱で家へ土産に・・・良い時代であった。

当時の築地市場への物流は船と貨車である。汐留の高層ビル群は当時「日通」の操車場でそこから貨車で荷が運ばれていた。今も線路跡の段差が其の儘である。当時は勝鬨橋も開閉し橋の袂から佃方面へは土手道があり、佃の渡し船が兩岸から同時に出航し人や自転車を運んでいた。仕事は昼で終わる。市場から明石町の学校（17:30より）迄は10分、有り余る時間をどう過ごすか??? 勿論、京橋図書館や日比谷図書館で勉強するとい

う手もある・・・が日比谷へ向かう前に木挽町、尾張町の銀座がある。

当時は首都高はなく松竹本社や東劇の前は川であり牡蠣船（川面に繋留しカキ料理やその他の料理をだす船、数寄屋橋の下にもあった）が繋留されており風情があった。歌舞伎座の看板を横目に昭和通りから四丁目と銀座は毎日のように歩いた。

銀ブラという言葉が在るほどブラブラしても退屈はしない。一丁目にテアトル東京、二丁目の並木通りに並木座、三丁目に松屋、四丁目に三越や映画館の銀座文化、六丁目に松坂屋、七丁目にジャズ喫茶アシベなどあり結構な散歩コース。



しかし、学生服で昼間、毎日のようにうろついていると怪しまれるらしい。ある日三越のそばで築地署の刑事に職務質問。「今日、学校は?」こちらも時間があるので「まだ行く気がしないんですよ」と答えると、路地へいざなわれた。いろいろ問答した揚句、学生証を提示「なに定時制?なら始めからそう言えよ、じゃ一寸来い」当時三越の並びにミルクホールがあり、そこでヨーグルト（生まれて初めて）を馳走になりその後も時々会うと「元気か、食いたいものないか」で一度食べたかった餃子、読み方も知らず「あれはなんて読むんですか?」で初めて餃子を馳走された。

たしか元力士の天竜が出した店だったと思う。大きい餃子（一皿8個）で有名、後に他の店で餃子を食って小さいのに驚いた。今でも「天竜」は時々行く、あの当時と場所は違い、餃子も少し細くなったが一皿完食は厳しくなった。

魚河岸は楽しく魅力的であるが、当時店舗の権利がとてつもなく高く将来独立は厳しいな、それ

に学校が終わり帰宅するのが夜 11 時、就寝が 12 時、起床午前 3 時半は若いとはいえかなりきつく、8 ヶ月位で見切りをつけた。

しかし、築地魚河岸には何か縁が在り、後年、別のかたちで仕事に係わる事になる。

銀座での広告業*4

次に何をするか？築地の次はやっぱ銀座でしょう、それも趣を変えて今度はメディア？関係。大東広告という三丁目にあった小さな会社である。テレビは白黒の時代、広告の媒体はラジオと新聞、雑誌。私の仕事は簡単な事務仕事と当時の交通手段の主流である都電の全線定期を購入し、都電で銀座にあった読売新聞、数寄屋橋にあった朝日新聞、有楽町の毎日新聞を始め、民放である日本放送等のラジオ局、初期のテレビ局へ広告のグラヤテープなどを届ける仕事である。



当時有楽町駅から数寄屋橋へ行く途中、右に日劇、左に朝日新聞があり、印刷の大型輪転が回り、紺の作業服を着た文選工が活字を拾っていた。大東広告は、今でいうクライアントに「レナウン」などがあり小さいが堅実な会社で「厚生年金」加入はここから始まった。新聞社の社会部、印刷部、放送局のスタジオなどのぞき、たまに芸能人も見る事ができ遊び感覚の毎日であった。

当時、朝日新聞と路を隔てて日劇があり、日劇には小劇場として日劇ミュージックホール(上品なストリップ劇場)がある。私の楽しみは朝日新聞の6階である。仕事を済ませ、やおら窓から日劇を見る。窓からは円形ビルの日劇の窓のガラス

越しに踊子の更衣室が・・・なかなかの眼福ものであった。

そんな毎日に終止符を打ったのは、電通本社へ行き始めてからである。電通は、数寄屋橋から新橋へ向かう七丁目の角にあり、受付の後ろの壁に電通 4 代目社長吉田秀雄の「鬼の十訓」が掲げられており確か三番目あたりに「大きな仕事に取り組み、小さな仕事はおのれを小さくする」-これが強烈な印象で行くたびに心に響く。眼福などと鼻の下伸ばしている時ではない。遊び半分の仕事はやめようと 8 ヶ月ぐらいで退職する。

*1 東京江東クラブブリテン:2012 年 2 月号掲載

*2 東京江東クラブブリテン:2012 年 3 月号掲載

*3 東京江東クラブブリテン:2012 年 4 月号掲載

*4 東京江東クラブブリテン:2012 年 5 月号掲載